

北海道江差から北前船がもたらしたものの第13号

赤穂市教育委員会提出予定 平成28年11月30日

北前船寄港地フォーラム I N北海道江差に参加して

平成28年11月11・12日

報告者 寺井 秀光



北海道にも平年より約2週間ほど早く雪が降り、秋を飛び越え冬がやって来ていた。函館上空から見た道南地域もすっかり薄化粧をしていたが、少し遅れて行った我々を気づかなくてか、前日の寒さが嘘のように暖かい日であった。

北前船に関わってまだ1年が過ぎたところであるが、偶然的な出会いが多く重なり、まったくの素人の我々は北前船に深く関わるようになった。まるで北前船が導いてくれた・・・ そんな不思議な思いである。そして今回もいろいろな出会いがあった。



江差は函館空港から車で約2時間かかった。途中メイクインの畑が長く続いていた。メイクイン発祥の地だそう。やがて日本海に出て、少し海沿いに走ると帆船が見えた。将軍徳川慶喜が大坂を脱出する際に乗った幕府軍の軍艦である開陽丸で、江差町のシンボリック的存在となっている。幕府軍の榎本武揚が土方歳三・大鳥圭介などの敗戦兵を蝦夷地へ運んだ帆船で、かつての開陽丸は江差の沖に沈んでいる。ここ江差は人口8104人の日本海に面した漁村で、そこにある江差町文化会館が会場となっていた。遠くは広島などから各地の500人あまりの人が参加した。

私たちが会場に着いた時はすでにフォーラムは始まっていて、会場内からは北の地を連想させる江差追分の歌声が響いていた。我々は会場には入らず赤穂市坂越のブースを開き、播磨屋さんの塩味饅頭と奥藤酒造のお酒をフォーラム参加者に振る舞った。大変な盛況で多くの関係者に坂越の名前を知っていただけたのではないかと。また この会場で近くのスポーツ都市として成

功している北斗市に視察に来られていた赤穂市の市議員さん6名が忙しい合間をぬって我々のために応援に来てくださった。

我々の隣には洲本市がブースを出し、クイーン淡路島と共に淡路の売り込みをしていた。そのほか江差・函館・秋田・酒田・加賀・敦賀・尾道・鳥取・岡山市などが観光・物産のブースを開き、彼らと大いに交流を図ることができた。因みに行政以外で参加していたのは我々だけであったので市議員さんの応援は心強かった。またこの観光・物産のブースにフォーラムの代表者や北海道の有力者の方々が訪ねてくださり名刺等を交わすことができたことも今回の大きな成果だった。

フォーラムの第一の目的は人的交流で、第二は主催地の観光PR、第三はフォーラムを開くことで日本遺産の候補地になれることだ。そのためJR、ANA、JAL、各大手旅行会社、観光庁、文化庁、国土交通省、そして各地方行政機関の観光課・産業課の職員で構成されている。

フォーラム2部ではJR北海道の代表取締役社長の島田修さんの基調講演があり、人口が疎らで気象条件がきびしいため赤字を重ねてきたJR北海道に新幹線がきたことでやっと黒字路線を持つことができた。新幹線こそ本州よりも北海道に必要な鉄道であると強調していた。資金がなければインフラ・産業の維持管理は不可能に近い、いろいろと不祥事を起こしたことは人の命を預かるJRにとっては釈明の余地はない。しかしそれを遂行しようとするれば鉄道路線を少なくし管理・維持をし易くするしかない。北海道道民にとってそれは致命的なこととなるかもしれない。

フォーラム3部ではパネルディスカッションA「北前船と江差文化を語る」で、江差と言えばなんといっても頭に浮かぶのは「江差追分」ではないだろうか。信州馬籠に端を発した「追分」が北前船に乗って江差まで来て「江差追分」が歌われるようになった。その歌は1000種以上あり、聞く人・歌う人によりその情感は様々といわれ、最後には涙がほほを伝うと言われる。

パネルディスカッションBでは「道南の文化遺産と観光資源の輝かせ方」と称して、観光で成功した例を挙げ意見交換がなされた。

終わりに次期開催地の洲本市長竹内道弘氏が挨拶をしてフォーラムは閉会となった。本来は兵庫県が開催する予定だったが、他の寄港地がまだ参加を表明していない為、洲本市中心に、淡路島だけで開催の運びとなる可能性が高まっている。そうすると日本遺産も視野に入れて一生懸命に活動してきた私たちにとっては一つの道が絶たれることとなる。

フォーラム終了後、レセプション会場となった近くのニューえさしというホテルに会場を移し酒宴が行われた。江差町の町民によるご当地料理でお持て成しを受けた。さすが北海道で食材が豊富でどれもほんとうに美味しかった。お昼の弁当を遅く食べたことが非常に悔やまれた。我々も負けずに奥藤

酒造の忠臣蔵大吟醸3本を振る舞ったが、15分もしないうちになくなってしまった。

またこの会場で来賓の紹介をする際に洲本市の代表といっしょに壇上に上ることができたのは光栄であった。

宴会も終わり同ホテルの部屋に戻ったが、お腹がいっぱいでなにか飲み足りなかったので、シャワーを浴びそうそうに一人で町に出てみた。町を散策しているうちにひっそりとただづむ雰囲気よさそうな小料理屋を見つけ入ってみた。先客が一人いたがご夫婦で営む趣のあるいい店だった。おまかせで料理を頼み八海山の純米酒をぬる燗で注文し、先客と女将さんの会話をしばらく盗み聞きしていた。するとそのご夫婦は今日のフォーラムで「江差三下り」というちょっと艶ぽい舞の歌と尺八を担当していた人たちとわかった。



私も今日のフォーラムの会場にいたと話したことから話が弾み、やがて「江差追分」の話になるとご夫婦が熱く語り始めた。女将さんは全国江差追分コンクールで日本一にもなったことがある強者でほんとうに驚いた。先客が帰った後、一曲だけうなりましようかといってくださいだったので、ぜひにとお願いした。女将さんはお昼に声を出したので、もうう

まく出ないかもしれませんが・・・とことわり一曲だけということで聞かせていただいた。

一つの言葉を独特な抑揚をつけながら長く歌う「江差追分」は、その抑揚がまるで潮騒か波音に聞こえ情感を作り出す。そしてそこに歌い手の気持ちが込められるため目を閉じると聞き手のインスピレーションと相まってその情景の中へ誘い込まれる。歌っていただいた歌が分かれの歌だったため、悲しく淋しい思いにかられた。すばらしく、貴重な経験をさせていただきほんとうに感謝につきない。

歌が終わったころ10名ぐらいの人が入ってきた。その中のリーダー格の人が、また女将さんに「江差追分」をリクエストしていた、地元の有力者風で断り切れない雰囲気ので気の毒に思えたが、その人たちもまたフォーラム関係者で同席させていただくこととなった。聞けば北海道江差フォーラムの実行委員長と大阪21世紀フォーラムの会長、大学教授、JR、そして今日のフォーラムを企画した人たちだった。その場で坂越についてお話をさせていただいた。すると「あなたたちが一生懸命に活動していることはわかりました。お聞きすると坂越という港は北前船にとって欠くことのでない所のようなのでね」というお褒めのお言葉をいただいた。その後女将さんのすばらしい「江差追分」を聞き、12時過ぎにホテルに戻った。

